

6

# エストニア人とことば

★「エストニア語」の成立★

## 「エストニア人」の成立

「日本人」は、日本という国に属する人をさすときと、日本語を母語とする人をさすときがある。前者は国家への帰属という法律上の資格（国籍）の問題であり、後者は同じ文化を共有する民族集団への帰属という考え方、あるいは気持ち（民族意識）の問題である。この二つは、まったく別の次元の問題で、それぞれの意味する「日本人」がびったり一致することはありえないのだが、現実には無意識のうちに混同される傾向がある。「エストニア人」という呼び方にも、まったく同じ二面性がある。

国籍と民族意識が予定調和的に一致するのが国家の理想的なありかただとみる考え方を「国民国家」と呼ぶ。平たく言えば、日本という国に属する人は日本語を話す日本人であり、その逆もなりたつとする考え方だ。民族の独立とか愛国心などというときは、この考え方が背景にある。

国家と民族の関係に関するこの見方は、一見自明のように見えるが、世界的に見ると比較的新しく、19世紀のヨーロッパで有力になり今日に至っているにすぎない。当のヨーロッパで

も、18世紀までは、母語よりは、宗教（教会）がコミュニティの形成にとって重要であったと考えられている。そのころは、国への帰属といっても、特定の国王に対して忠誠を誓う領土の支配地域に住んで、領主に税金を収める程度のもので、現在私たちが思い浮かべるような民族的な愛国心があつたわけではない。民衆にとっては、宗教を同じくする人たちとの間の共同体意識のほうがはるかに重要だった。

18〜19世紀のロシアの行政区画では、今のエストニアの北半分だけが「エストニア県」（エストラン



エストニア語で「エストニア人」という言い方が最初に使われたとされる週刊新聞「ペルノ・ポスティメース（バルヌの郵便夫）」の創刊号（1857年6月5日号）。この新聞の名前は、エストニア最大の日報「ポスティメース」の名前に引き継がれている。

ト）と呼ばれ、南半分は今のラトビアの北半分と一緒に「リボニア県」（リーフラント）に属していて、それぞれ別の教会の管轄だった。「エストニア語」「エストニア人」という呼び方さえ、当時は地元に住むドイツ人たちが使っていただけで、当のエストニア人たちは、自分たちは「土地の言葉」を話す「土地の人々」だと思つて考えていた。当然ながら、今私たちが知っているエストニアという国の概念はなく、したがって国家への帰属意識としての「エストニア人」という考え方はまだ生まれていない。しかし、19世紀の中頃にな



西エストニアの中心都市バルヌの街角に立つ、週刊新聞『ペルノ・ポスト・ヤメース』の編集者・発行人のJ・V・ヤメセン(1819～1890)の手に新聞を持つ姿をかたどった銅像(筆者撮影)

次第に確立する。

エストニア語を母語とする読者に向かって「エストニア人のみなさん」(Eesti rahvas)と最初に呼びかけたのは、1857年6月5日付で出たエストニア語の週刊新聞『ペルノ・ポスト・ヤメース』(Perno Postimees パルヌの郵便夫の意)の創刊号とされる。また、「ペイプシ湖岸からバルト海の沿岸まで広がり、ムナマキ山の森と草原から穏やかなフィンランド湾まで広がる国」がエストニア人の祖国だという意味の詩が1873年に書かれている(ミヒケル・ヴェスケ「祖国」)。

### 「エストニア語」の成立

「日本語の歴史」というと、ふつうは日本語がまとまった形で書き留められて、今日まで保存されている時代をさす。万葉集あたりを区切りにして、それ以前は「日本語の先史時代」の領域だ。これと同じ意味での「エストニア語の歴史」は17世紀から始まるといっている。ちなみに、現存する最古のエストニア語のテキストは16世紀前半のものだが、断片が発見されているだけである。

まとまった量のあるエストニア語の資料でもっとも古いのは、1600～06年に、ドイツ人の牧師がエストニア語で書いた39編の説教用の原稿である。17世紀の後半には、新約聖書の南エストニア語訳(1686年)が出ている。「南エストニア語」というのは、当時のタルトを中心とする南エストニアの方言に基づく書きことばをさす。一方、タリンを中心とする北エストニアの方言に基づく書きことばは「北エストニア語」と呼ばれる。二つの文章語の存在は、当時の行政区画の反映というよりは、それぞれの地域を管轄していた教会が、地元住民のことばに合わせたエストニア語の文章語を必要としたために生まれた状況である。この時期は、文法書もそれぞれのエストニア語別に書かれていた。

18世紀には、旧約聖書を含む聖書の全訳(1739年)が北エストニア語で出た。南エストニア語では聖書の全訳が出ることはなかったが、これは、ロシアとスウェーデンとの間で戦われた北方戦争(1700～21年)によってタルトが荒廃し、南エストニア語圏が文化的中心を失ったことが主たる原因とされる。1632年に創立されたタルト大学(の前身)もこのとき閉鎖の憂き目を見た。当時の人々の言語生活における聖書の役割は絶大であり、南エストニア語の影響力の衰退が、現在のような北エストニア語を主体とする標準エストニア語の成立を運命付けたとみていいだろう。

18世紀まで、エストニア語の書きことばは、エストニアに住みエストニア語をそれなりに習得した

ると、自分たちは「エストニア語」を話す民族集団なのだと言える人々があらわれ始める。そして、「エストニア人」(eestlane 個人)、(Eesti rahvas (集合名詞) エイステラネ ラフヴァス) という言い方がエストニア語でもふつうに使われるようになって、ようやく民族意識の意味での「エストニア人」の考え方が

ドイツ人牧師たちが、エストニア人を対象とする宗教活動のために使っていたものだった。エストニア人たちが日曜日の教会で、ドイツ人牧師たちから聞かされた「エストニア語」は、ドイツ語訛りの発音と、耳慣れないドイツ語やラテン語が混じったものだったと思われる。エストニア人たちは戸惑いながら聞いていたに違いない。19世紀に入るとこの状況が大きく変わり始める。ドイツ人たちは教会の外のエストニア人のことばに関心を向け始め、これまで教会で使われてきた書きことばと、実際に話されているエストニア語との間の隔たりの大きさにようやく気づき始める。他方では、1816年にタルトの大学がロシアの帝国大学として復興され、高等教育を受けるエストニア人も現れ始める。ただし、大学の講義や研究にはもっぱらドイツ語が使われ、エストニア語は研究対象にすぎなかったが。

エストニア語が現在のように、マスコミや文学はもちろん、国会や裁判所、さらには自然科学や医療の現場でも機能する言語になるためには、まず、それまでドイツ人聖職者たちの宗教活動の道具にすぎなかったエストニア語の書きことばが、エストニア語を母語とする人たちの使用に耐えるものへと大変身を遂げる必要があった。まず、長い間使われてきた、エストニア語の発音を無視したドイツ語風の綴りを捨て、エストニア語の発音をより正確に表せるフィンランド語風の綴りに移行するための改革が30年くらいかけて行われた。次の段階は、文法と語彙を共通化して、地域方言の差を克服した標準的な文章語を制定することである。当時、南エストニア語は衰退していたから、北エストニア語に近い文法のエストニア語の標準文章語が生まれることになるが、語彙の点では南エストニア語の要素もたくさん取り入れられた。また、農民の話しことばとしての日常エストニア語に欠けていた抽

象的な概念を表す語彙や、法律や科学などの専門用語も次第に考案されていった。これは明治期の日本語とよく似ている。こうして、20世紀の初頭には、本格的な文学作品を書くことだけでなく、学校のさまざまな科目の教科書をエストニア語で編集することがふつうにできるようになっていた。1918年にロシアから独立するとすぐに、法律をエストニア語で書き、高等教育をエストニア語で行うことができたのは、こういった準備期間があったおかげである。

エストニア語の標準文章語の社会的基盤は、エストニアがソ連邦に併合される1940年ころまでにすっかり定着し、揺るがないものとなっていた。100万人程度の話し手しかいないエストニア語が、独立時代に担っていた社会的役割の重要な部分を奪われたうえ、半世紀の長きにわたるソ連体制下で、地域的民族語と位置づけられ、ソ連邦のあちこちから流入してきた50万人もの移民の話すロシア語と併用される境遇に置かれたにもかかわらず、1991年のソ連邦崩壊による独立回復と同時に、かつての国語としての社会的機能のすべてをすぐに回復できたのは、運がよかったからだけではない。

(松村一登)